第5篇　絶対的および相対的剰余価値の

生産

第14章　絶対的および相対的剰余価値

〔的場超訳『資本論』ｐ.226による〕

資本主義的生産はたんに商品生産だ

けでなく、本質的に剰余価値の生産で

ある。労働者は自分のためではなく、資

本のためにつくる。ただ、労働者が生産

すると言うだけでは不十分だ。剰余価

値を生産しなければならない。労働者

が生産的なのは、資本のために剰余価

値を生産するか、資本の自己増殖に役

立つ場合だけである。

二つの「包摂」

生産的労働である資本主義社会の労

働について、

❶労働日を延長して得られる絶対的

剰余価値と、

❷一定の労働日内で労働強化を行な

うことで生まれる相対的剰余価値に

移っている。

絶対的剰余価値の生産は、旧来の生

産様式によっても生まれる。資本家は

いまだ完全に労働過程を自分のものと

して従属させていません。「形式的包摂」

とは形式的に就属させているだけの意

味。そして、機械の導入によって、生産

そのものが完全に従属する場合、つま

り過去労働である機械への否応なしの

労働過程の従属のことを「実質的包摂」

と区別している。

〔浜林『資本論』を読む　下p.148〕

第5篇は、剰余価値論のまとめと応

用問題である。まず、最初に労働過程と

生産過程の区別がとりあげられる。

（p.884）労働過程は、何よりもまず、その歴史的形態にかかわりなく、人間と自然とのあいだの過程として、抽象的に考察された（第5章）。そこでは次のように述べられている――「全労働過程をその結果の（すなわち生産物の）立場から考察すれば、労働手段と労働対象の両者は生産手段として、労働そのものは生産的労働として現れる」。（第1巻p.315～316）そして、注7では、次のように補足された。――「生産的労働のこの規定は、単純な労働過程の立場から生じるのであって、資本主義的生産過程にとっては決して十分なものではない」（同前、p.316）。このことが、ここでさらに展開されなければならない。

（労働過程）

労働過程とは、人間と自然とのあい

だの過程である。人間が自然に働きか

けて、物がつくられ、その物もさらには、

人間自身も自然に帰る。人間が自然に

働きかけていくのは

p.885　その歴史的諸形態にかかわりなく、

である。

（生産過程）

労働過程において、物をつくるとい

うことは生産過程だが、それぞれの社

会で、それぞれ違った形をとることに

なる。

資本主義社会では、資本家が労働

者を雇い、物をつくる形をとる。労働過

程で結合されていた「頭の労働」と「手

の労働」が分離する。つまり、自分で考

え、自分で手を動かすという仕事のや

り方が分離するということ。

p.886　のちには、この二つは分離して、敵対的に対立するまでになる。

協業を計画し、指揮し、実行させる労

働も出てくる。

（生産的労働）

p.886　生産的に労働するためには、みずから手をくだすことはもはや必要でない。

畑を耕すなど、自分でしなくても、そ

れが生産的労働ということに入ってく

る。

p.886　しかし他面、生理的労働の概念はせばめられる。資本主義的生産は商品の生産であるだけでなく、本質的には剰余価値の生産である。

労働過程で考えあると物をつくるこ

とが生産であった。

　　　　　　資本主義社会では、単に物をつくる

だけでは生産的労働といわず、売れな

いものをつくるのは生産的労働でない。

p.887　すなわち資本の自己増殖に役立つ労働者だけが、生産的である。

生産的労働とは、「資本の自己増殖」

－剰余がつくられ、資本に繰り入れら

れ、資本がますます大きくなっていく

‥

（教師の労働）

p.887　学校教師は、児童の頭脳を加工するだけでなく、〔学校を所有する〕企業家を富ませるための労働にみずから苦役する場合に、生産的労働者である。

私学－教育というサービスを提供し、

賃金が支払われ、経営者のもうけをも

たらしている場合、生産的労働者だと

言っている。

p.887　生産的労働者であるということは、幸福ではなく、むしろ不運である。

兵器をつくる軍事工場－武器は人を

殺す。有害。役に立つかどうかではなく、

資本主義社会ではもうかるかどうかが、

生産的労働の基準となる。

「不運である」：搾取されている。

（絶対的剰余価値生産が出発点）

p.888　それは資本主義制度の一般的基礎をなし、また相対的剰余価値の生産の出発点をなしている。

絶対的剰余価値は、労働日の延長―

日の労働時間が長くなること。

　　　　　　必要労働時間はある一定の定まった

時間なので、剰余労働時間が長くなる。

必要労働時間は6時間。剰余労働時

間が6時間。労働日が延長されて14時

間になると剰余労働時間は8時間にな

る。それが絶対的剰余価値である。

「出発点」：そもそも絶対的剰余価値

がというものがなければ、つまり労働

者が自分の生活に必要な部分しか生産

しないとすれば、相対的剰余価値もな

いわけである。もともと、労働者が剰余

をつくる力をもっているということ。

p.888　相対的剰余価値の生産は労働の技術的諸過程および社会的諸編成を徹底的に変革する。

相対的剰余価値は、生産力をたかめ

ることにより、必要労働部分が減って

いくということである。

　　　　　　生産力の発展は主として技術革新に

よってすすめられる。すなわち、「技術

的諸過程」が変革され、「社会的諸編成」

は分業のこと。

（資本のもとへかかえ込む）

相対的剰余価値の生産。は資本主義

的な生産様式を前提にしている

p.888　最初は、資本のもとへの労働の形式的包摂を基礎として、自然発生的に成立し、発展させられる。形式的包摂に代わって、資本のもとへの労働の実質的包摂が現れる。

「包摂」：包み込む、かかえ込む。

　　　　　　資本が労働を形式的に、あるいは実

質的にかかえ込むという二つが書かれ

ている。

p.889　絶対的剰余価値の生産のためには、資本のもとへの労働者の単なる形式的包摂だけで――たとえば目前には自分自身のために、あるいはまた同職組合親方の職人として労働していた手工業者が、いまでは賃労働者として資本家の直接的管理のもとに入ると‥‥。

形式的包摂：独立していた生産者が

資本の支配下に入る。

実質的包摂：資本が労働者の働き方、

技術などを資本の命令のもとに変えて

いく。労働者を生産過程の一部にして

しまう。相対的剰余価値の生産がいっ

そう発展する。つまり、技術的変革が行

われるということ。

p.889　相対剰余価値の生産のための方法は、同時に絶対的剰余価値の生産のための方法でもあることが明らかになった。

相対的剰余価値をつくりだそうとす

れば、必要労働時間を短縮しなければ

ならないが、絶対的剰余価値をつくり

出す前提である。それは、労働者は自分

の生活に必要なもの以上のものをつく

っていなければならない。これが大前

提である。

（絶対的剰余価値と相対的剰余価値の区別は幻想か）

p.890絶対的剰余価値と相対的剰余価値との区別は、一般に幻想的に見える。相対的剰余価値は絶対的である。というのは、労働者自身の生存に必要な労働時間を超える労働日の絶対的延長をそれは条件としているからである。絶対的剰余価値は相対的である。

まず、なによりも必要労働時間を超

えることがなければならない。逆に「絶

対的剰余価値は相対的である」という

のは、必要労働時間が、労働日の全部を

占めるのではなく、一部分になるよう

な、それだけの生産の発展がなければ

いけない。その意味で、相対的剰余価値

を前提としている。

　資本主義生産様式では、絶対的剰余

価値として高めるのか、相対的剰余価

値として高めるのか、この区別は大事

な問題になる。

（剰余の発生）

p.891　労働者が、彼自身と彼の種族の維持に必要な生活手段を生産するために彼のすべての時間を用いるとすれば、彼には第三者ために無償で労働する時間は残されていない。

　労働者が自分の生活ギリギリの分しかつくり出すことができなければ、搾取もできない。原始共産制－みんなで働き、みんなで消費した。

p.891　……労働者にとってこのように自由に処分できる時間はないのであり、そしてこのような余分な時間がなければ、剰余労働もなく、したがって資本家もなく、しかもまた奴隷所有者もなく、封建貴族もなく、ひとことでいえば大所有者階級はいないのである。

p.891　人間がその最初の動物的状態からようやく脱出し、したがって人間の労働そのものがすでに一定程度まで社会化されているときのみ、

p.891ある人の剰余労働が他の人の生存条件となるような諸関係が生じる。

「ドイツイデオロギー」では、人間は

欲望を満足させるために生産するので

あるから、ある欲望を満足させると次

の欲望が出てくる」

p.892　諸要求は、その充足手段とともに、またその手段によって発展する。

p.892　……他人の労働によって生活する社会部分の割合は……自然の賜物ではなくて、何十万年にもわたる歴史の賜物である。

他人の労働を搾取しているという意

味。

　　　　　　賜物：生産力の発展による。

（自然の豊かさ）

p.893　文化の初期には自然的豊かさの第一の種類が決定的であり、より高度な発展段階では、第二の種類が決定的である。

（自然条件と生産力）

p.894　資本の母国は、植物の繁茂している熱帯風土ではなく、むしろ温帯地域である。

「自然的豊かさ」：果物の恩恵。

文化が発展すると、多くの生産物が

つくられる

p.896　自然的諸条件の恵みは、常に、剰余労働の、したがって剰余価値または剰余生産物、可能性を与えるだけであって、決してその現実性を与えるものではない。

自然が豊かであれば、剰余ができる

可能性はあるが、現実にできるのは、や

はり人間労働が必要である。

p.896　産業が前進するのと同じ程度に、このような自然的制限は後退する。

自然の影響はだんだんなくなってく

る。

（リカードウ派の社会主義）

p.898　これにたいして、彼の学派は、労働の生産力を利潤（剰余価値と読め）の発生原因として声高く宣言した。いずれにしても、重商主義者――彼らの方では、生産物の価格がその生産費を超える超過分を、交換から、生産物をその価値よりも高く販売することから、導きだしている――よりは、一つの事実である。

労働の生産力が利潤の発生原因であ

ると主張。労働の生産物はすべて労働

者のもの－労働全収益権。

p.898　「利潤の原因は、労働が、労働の維持に必要であるよりも多く生産することである」

ミルはリカードウよりも後退した。

了